

資料1 泡瀬干潟・海草藻場、サンゴ群集モニタリング調査結果（2004–2011）

■ モニタリング地点



■ 海草藻場の消失

1. 干潟域（第Ⅱ区域）の小型海草群落（コアマモ・マツバウミジグサ）が激減（LS）
 - ・浅場の豊かな海草藻場（マツバウミジグサ・コアマモ群落）に70mのモニタリング調査ラインを設置し、2004年から毎年調査を実施



2004年



2011年



2004-2011 年のマツバウミジグサ・コアマモ群落の変化 (LS)

2004 年 9 月



2005 年 9 月

埋立工事
スタート

2006 年 10 月



2007 年 9 月



2008 年 8 月



2009 年 8 月



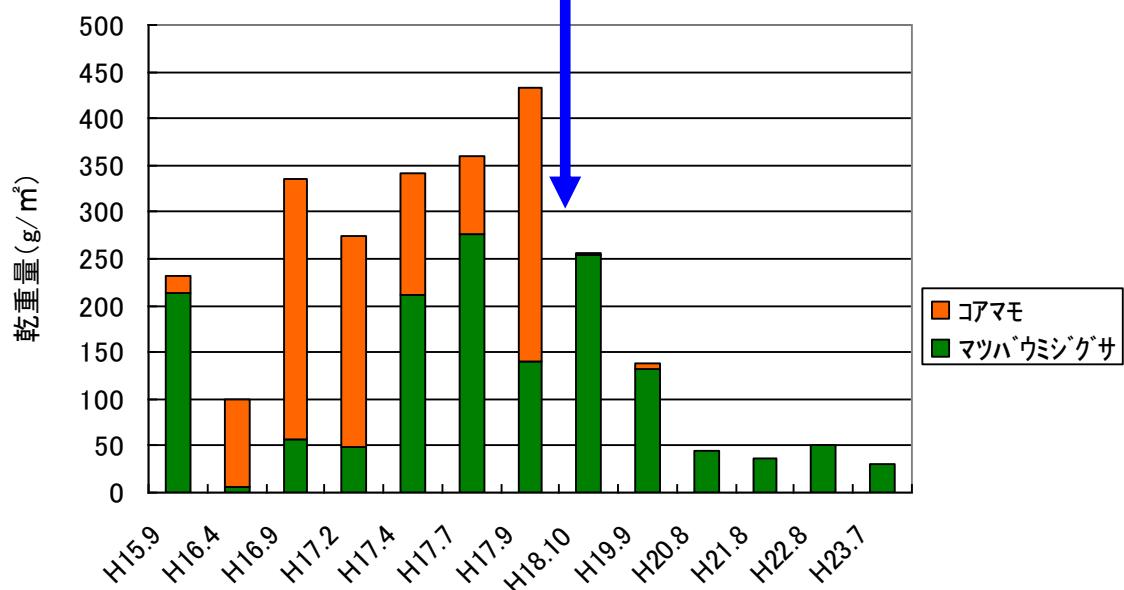
2010 年 8 月



2011 年 7 月



埋立工事本格スタート



マツバウミジグサ-コアマモ群落(LS)のバイオマスの変化

*海草の生育量は激減し、調査地ではコアマモが全く見られなくなった

2. 潮間帯（陸から 500 m 付近）のマツバウミジグサ・リュウキュウスガモ・ウミジグサ群落が消失 (L1)

- 埋立て計画地より陸側の浅場の豊かな海草藻場に 600m のモニタリング調査ラインを設置し、2004 年から毎年調査を実施



2006 年 1 月から仮設桟橋周辺の浚渫など本格的な埋立工事がスタート



2007年



海草群落が激減



2008年



海草群落がほぼ消滅



2009年

海草群落の回復は見られない



2010年



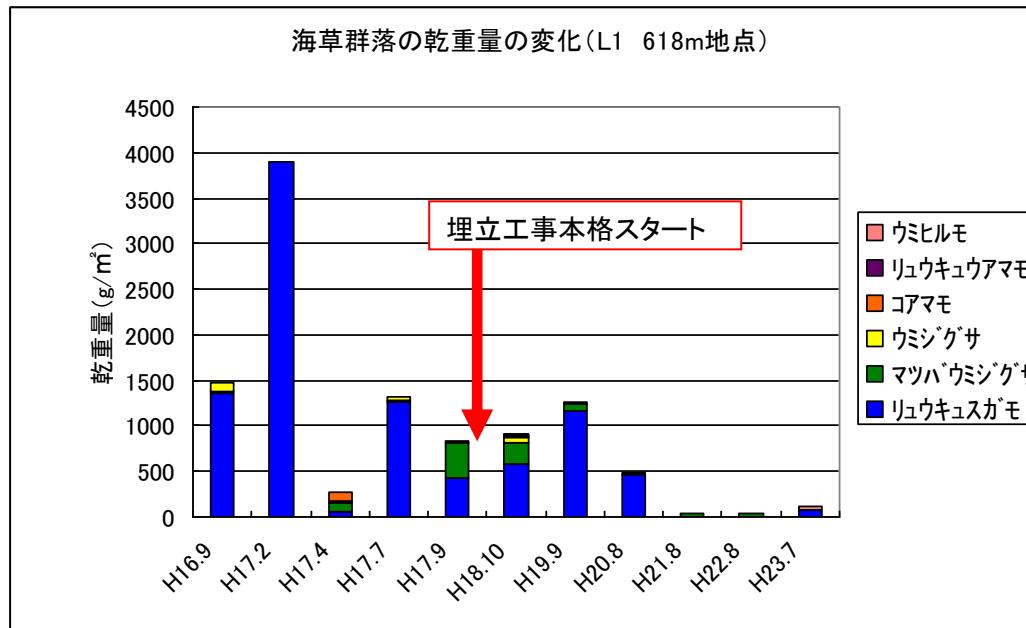
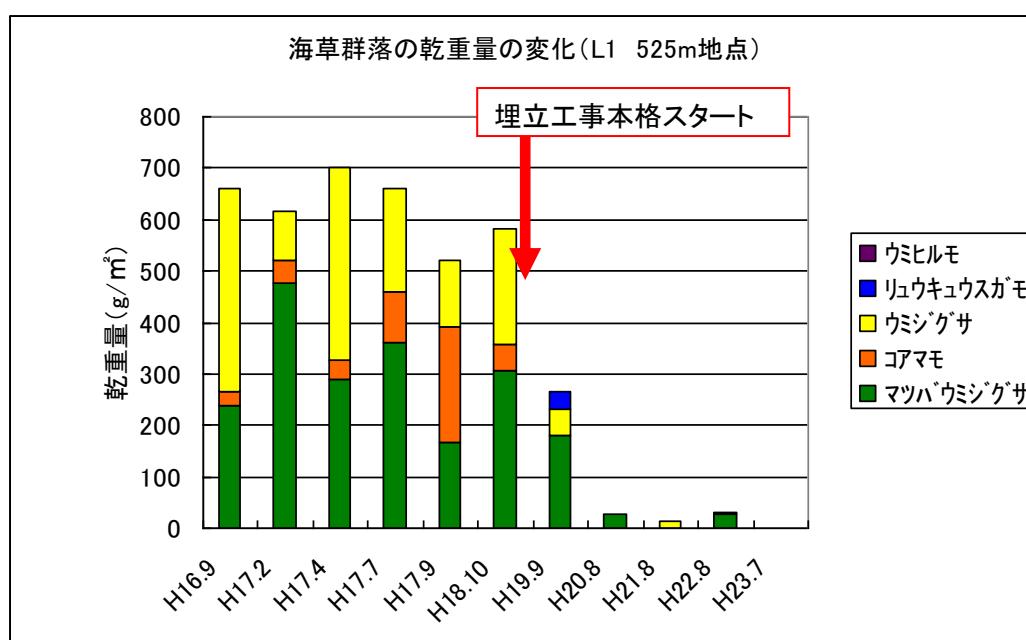
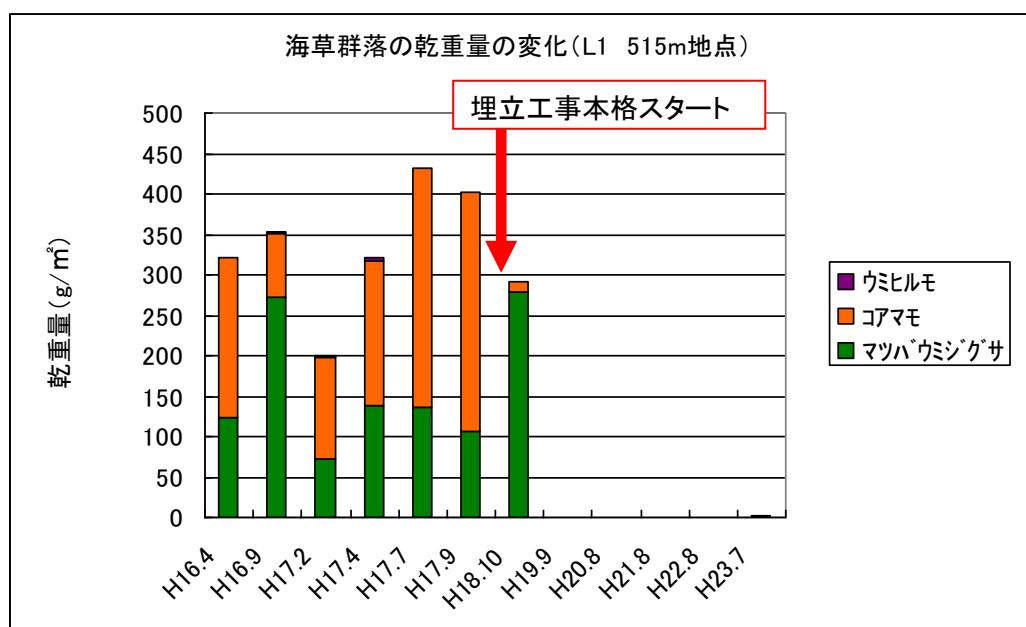
リュウキュウスガモ・ウミジグサが周辺にもほとんど見られなくなった



2011年



多様性は無くなり、マツバウミジグサがわずかに見られるだけとなった



■サンゴ群集が劣化

1. 第Ⅰ区域内に生息していたサンゴ群集は生き埋めに（サンゴ1）



2005年

スギノキミドリイシ



リュウキュウキッカサンゴ（小橋川共男撮影）

第Ⅰ区域内には、スギノキミドリイシ、リュウキュウキッカサンゴなどが約976m²生息していた。しかし、事業者は何の保全措置も取らず、2009年1月に埋立護岸内に浚渫土砂の投入を始めた。

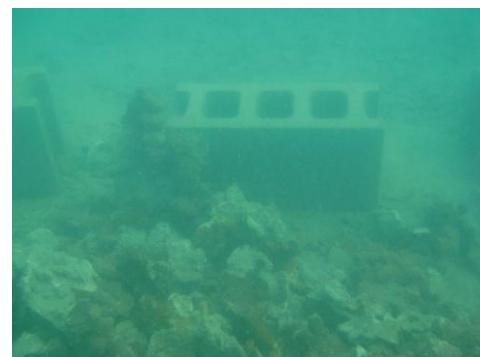
区域内のサンゴの一部については、2008-2009年に沖縄市とNPOコーラル沖縄などにより約276m²が移植されたが、いまだ700m²は残っている。

しかし、サンゴ礁生態系というのはサンゴのみで構成されている訳ではないので、サンゴのみを移植してもそれを環境保全措置とは言えない。

移植されたサンゴについても移植先の選定や移植方法などに大きな問題がある。



西防波堤の沖側に移植されたスギノキミドリイシ
劣化した群体が目立つ（2011年）



移植されたリュウキュウキッカサンゴ
移植直後に泥をかぶって死んでいた（2009年）

2. 埋立地周辺に広がるヒメマツミドリイシ群集が劣化（サンゴ2）

2005年



西防波堤に広がるヒメマツミドリイシ群集
(小橋川共男撮影)



ほぼ毎年産卵が確認されていた

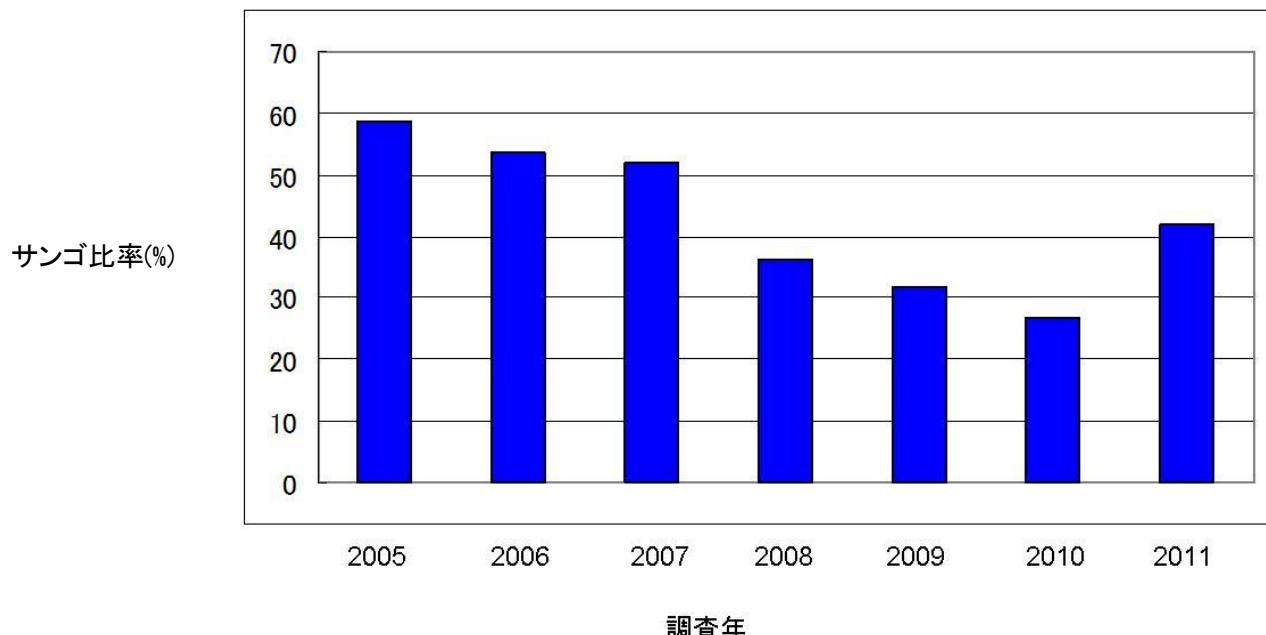
2009年



死滅が進むヒメマツミドリイシ



ヒメマツミドリイシ群集（西防波堤）の生息状況の変遷



■砂洲が大きく変形し、とうとう水没した（L2）

- 泡瀬通信基地の先端と西防波堤を結ぶ約1600mのモニタリング調査ラインで、砂洲東側に広がる海草藻場に設置し、2004年から毎年調査を実施

2004年



2003年



砂洲は海草藻場のずっと西側（写真右手：矢印）にあった

(Google)

2006年



2005年



陸から510m地点

(泡瀬干潟を守る連絡会撮影)

2007年



554m地点。砂洲は554～690mに位置する。

(泡瀬干潟を守る連絡会撮影)

急に盛り上がる高さがある砂洲に変貌

2008年



砂洲は、566m～690m



2009年



砂洲は、566m～700m

(Google)

2010年 砂洲は、537m～695m



2011年



砂洲は、467m～700m。平らに広がった

(泡瀬干潟を守る連絡会提供)

問合先

公益財団法人日本自然保護協会

〒104-0033 東京都中央区新川 1-16-10 ミヨビル 2F

Tel.03-3553-4101 <http://www.nacsj.or.jp>

担当：開発法子（事務局長） 安部真理子（保護プロジェクト部）

kai@nacsj.or.jp

abe@nacsj.or.jp